

CO写真集

要観察歯(CO=questionable caries under observation)とは

主として視診にて歯面に初期う蝕の兆候(白濁、着色、粗造面等)が認められるが、明らかな窩は認められない。カリエスリスクに注意し、う蝕が進行しないように食生活指導や清掃指導を行い、一定期間後(3ヶ月～6ヶ月)に経過観察する必要がある歯である。



—写真提供:柘植歯科医院—CO 写真の説明文:柘植紳平

症例 1

画像 A



画像 A: (判定=COもしくは健全)

7歳女子右上6。咬合面裂溝の一部が薄く茶褐色に着色している。この程度の着色であれば、カリエスリスクが低ければ、健全としてもよい。画像A2は同症例の2年後。着色がやや濃くなっているが、COもしくは健全の判定で良い。

症例 2

画像B



画像B：(判定＝CO(要相談))

12歳男子右下6。咬合面裂溝部に黒色の着色が認められるが、近心部に近心隣接面からのう窩を疑わせる不透過像を含む変色が認められる。これを見逃さないようにしたい。視診だけだと窩が確認できないので、健康診断時にはCO(要相談)と判定してかかりつけ歯科医院での相談を指示する。学校における健康診断のCOと C の境界にあたる症例である。実際の健康診断では、探針を用いて窩が確認できればCとするが、視診だけで明らかな窩が確認できなければCO(要相談)とする。

症例 3

画像C



画像C：(判定＝CO)

10歳男子左下6。咬合面小窩裂溝に黒色の着色が分散して認められる。頬側の小窩も黒褐色に着色している。この症例のように裂溝が浅い場合はう蝕が進行しにくい。

症例 4

画像D



画像D：(判定＝CO)

7歳女子右下6。咬合面及び頬側の裂溝部に褐色の着色が認められる。画像D2(判定＝CO)は同症例の2年後。着色が黒色に近くなっている。現在では着色が濃くなるほど安定して、う蝕が進行しないことが分かっている。もちろん、カリエスリスクの変化には十分注意して経過観察を継続する必要がある。

症例 5

画像E



画像E：(判定＝COもしくはCO(要相談))

8歳男子左下6。周囲にはプラークが堆積し、歯肉は発赤している。咬合面裂溝は黒く着色している。非常に危険な状態に思われるが明らかなう窩は認められない。不安であればCO(要相談)として相談を指示する。

症例 6

画像F



画像F: (判定=CO)

7歳女子右上6。咬合面から口蓋側の裂溝が褐色に着色し、それに沿って白濁が認められる。

症例 7

画像G



画像G: (判定=CO)

11歳男子左上6。咬合面から口蓋側の裂溝が黒色に着色している。典型的な安定した状態である。

症例 8

画像H



画像H: (判定＝COもしくはCO(要相談))

9歳女子右下6。咬合面裂溝が広い範囲で黒色に着色しているのが認められる。カリエスリスクが低ければCOで良いが、心配ならCO(要相談)として受診を指示する。

症例 9

画像I



画像I: (判定＝CO)

11歳女子左上6。咬合面遠心裂溝に黒色の着色が認められる。典型的な安定した症例である。

症例 10

画像J



画像J: (判定=C)

10歳女子右下6。咬合面近心裂溝部に視診で明らかな窩が認められる。要治療を指示する。

症例 11

画像K



画像K: (判定=CO)

10歳男子右下6。咬合面及び頬側面裂溝部が褐色に着色し、その着色に沿って周囲に白濁が認められる。見た感じ非常に危険な状態に思える。画像K2 (判定=CO) はその2年後。着色が濃くなっているが、周囲の白濁はまだ残っている。注意深く観察を継続する必要がある症例である。

症例 12

画像J



画像L: (判定=CO)

12歳女子左下6。咬合面裂溝の一部、及び頬側小窩に黒色の着色が認められる。裂溝が浅く、着色も濃くなって典型的な安定した状態である。

症例 13

画像M



画像M: (判定=COもしくはCO(要相談))

9歳女子左下6。咬合面裂溝部に黒色の着色が認められる。心配ならCO(要相談)とする。遠心舌側咬頭頂に認められる小窩のような不規則な小窩は、う蝕が進行しやすいので注意が必要である。注意深く観察を継続する必要がある。

症例 14

画像N



画像N: (判定=CO)

7歳男子左上6。裂溝部に薄い着色が認められる。画像N2は11歳(4年後)、画像N3は17歳(10年後)である。画像N4は左上から7歳、8歳、9歳、11歳、17歳、18歳の状態。着色が次第に濃くなっていくのが分かる。18歳時の数値はダイアグノデント測定値。

症例 15

画像O



画像O: (判定=COもしくはCO(要相談))

7歳男子左下6。萌出直後で裂溝内はプラークで埋まっている状態。非常に危険に思える。画像O2は10歳(3年後)、画像O3は11歳(4年後)。画像O4は左上から7歳、8歳、9歳、10歳、11歳の経年的変化。着色部が広がっていく様子が分かる。10歳時から認められる咬合面舌側の小窩は探針の不適切使用によるもの。探針の使用は禁止された訳ではなく、食物残さやプラークの除去、樹脂系充填物の確認に必要であるが、先端の鋭利でないものを水平的に動かして使用すること。垂直的に力を加えないことが大切である。